

二〇二二年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【博士後期課程】

一般外国語

日本語

※解答は別紙(縦書)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。《 》の中の仮名はその前の語の振り仮名である。

工芸の諸問題のうちで、過去に対しても将来に向っても、一番意味深い対象となるのは民芸の問題なのです。美の問題からしても経済の問題からしても、これ以上に根本的な工芸問題はないのです。何故なら工芸の鑑賞に浸る時、またはその真理を追求する時、誰もこの領域に帰って来るからです。「民芸品たること」と「工芸品たること」との間には、密接な関係が潜むからです。工芸が実用を生命とする限り、民芸をこそ工芸中の工芸と呼ばねばなりません。それ故、何人もこの問題に触れることなくしては、工芸論を組み立てることができないのです。

しかるに今日までこの領域が眞理問題として明確に取り扱われたことはないのです。もし正当にその意義が認識せられたら、工芸の歩むべき方向について、またそれを顧みるべき批判の原理について、一つの標的を捕え得るでしょう。だが多くの人々にとって、それは見慣れない世界であるに違いないのです。それ故私はできるだけ²「ヘイイな言葉」のうちに、順を追って目撃した眞理を記してゆこうと思うのです。恐らく何事よりも字句の意味から筆を起すのが至当かと思われまます。

民芸とは民衆が日々用いる工芸品との義です。それ故、実用的工芸品の中で、最も深く人間の生活に交る品物の領域です。俗語でかかるものを「下手《げて》」な品と呼ぶことがあります。「A」にいう「下」とは「並」の意。「手」は「質《たち》」とか「類」とかの謂《いい》。それ故民芸とは民器であつて、普通の品物、すなわち日常の生活と切り離せないものを指すのです。

それ故、ふだん使いにするもの、誰でも日々用いるもの、毎日の衣食住に直接必要な品々。そういうものを民芸品と呼ぶのです。したがって珍しいものではなく、たくさん作られるもの、誰もの目に触れるもの、安く買えるもの、どこにでもあるもの、それが民芸品なのです。それ故恐らくこれに一番近い言葉は「雑器」という二字です。昔はこれ等のあるものを雑具《ぞうぐ》とも呼びました。

「I」かかるものは富豪貴族の生活には自然縁が薄く、一般民衆の生活に一層親しい関係をもっています。それ故、実用品の代表的なものは「民芸品」です。例えば、御殿は王侯の造営物であり、民家は民衆の建物でいわば建物の中の民芸です。例えば金地襖(注)の彩画は貴族的な絵ですが、大津絵(注)の如きは「民画」とも呼ぶべくいわば民間の画です。民家、民器、民画、私はそれ等のものを総称して「民芸」と呼ぼうと思います。

しかし民芸品はごく普通のもの、いわゆる上等でないものを指すため、ひいては⁴粗末なもの、下等なものという連想を与えました。実際高級な品、「II」上等品に対してこの言葉を用いる時が多いため、雑器など云うと侮蔑の意に転じています。つまりらぬもの、やくざなもの、安ものを意味しています。このためか今日まで民芸品は工芸史の中に正当な位置をもつことができず、愛を以て顧みる者がほとんどなかったのです。

ですがこれは官尊民卑の余弊とも云いましょうか。⁵フウキなものにのみ美を認める見方は、極めて貧しい習慣に過ぎないのです。ごく並のものであるから、外形の上や用途の上では、上等でないかも知れませぬが、美から云っても粗末だというのは、許し難い不注意なのです。私はこれからそういう粗悪だという連想が、はなはだ間違っているということを、漸次に述べようとするのです。それ故「つまりらぬもの」という粗雑な見方を取り去るために、どうしても民芸の性質を正しく解しておかねばなりません。

「III」、「民衆的工芸と貴族的工芸と、どういう区別があるか、その性質の違いはどこにあるか。大体左の通りに考えてくださっていいのです。民芸品は民間から生れ、主に民間で使われるもの。したがって作者は

無名の職人であり、作物にも別に銘はありません。作られる数もはなはだ多く、価格もまた低く、用いられる場所も多くは家族の住む居間やまた台所。いわゆる「手廻り物」とか「勝手道具」とか呼ばれるものが多く、自然姿も質素であり、頑丈であり、形も模様もしたがって単純になります。作る折の心の状態も極めて無心なのです。とりわけ美意識等から工夫されるものではありません。材料も天然物であり、「B」れも多くはその土地の物資なのです。目的も皆実用品で、直接日々の生活に必要なものばかりなのです。製作の組織は多くは組合。これが民芸の世界なのです。

「IV」貴族的なものは、上等品であり貴重品です。したがって数は多くできず、また金額も高価になります。作る者は多くは名工。それ故、器には在銘のものが多のです。用いる人は貴族や富者です。実用品というよりも飾り物が多く、必然置かれる場所も客間や床の間。姿は絢爛であり、丹念であり、複雑なのです。技巧は⁷セイチを誇り、作る者も工夫し加工し、意識して作ります。材料も珍らしきもの、精製したのものと選びます。製作の組織は多くは官や富者の保護によります。こういうものがいわゆる貴族品の性質なのです。俗語でこれ等のものを「上手物《じょうてももの》」と云いますが、これはもとより「下手物《げてももの》」に対する言葉なのです。

一方が「民」なら、一方は「官」です。一方を民本的と云い得るなら、他は貴族的なのです。前者を協团的と云い得るなら、後者は個人的とも云えます。一つは「通常」の世界に住み、一つは「特殊」の世界に活きます。一方は「無想」に生れ、一方は「有想」に発し、前者は「平常心」を示し、後者は「分別心」を語ります。

あるいはこれ等の対比を、実用を旨とできる「工芸」と、「X」を旨とできる「工芸美術」とに分けてくださってもいいのです。前者は生活と直接関係があるものであり、後者はむしろ生活を遊離したものとなってきました。したがって一方は民衆の生活と交り、他方はフウキの生活に入ってゆきます。「Y」。または作る者の側から見て、これ等の区別を職人の作と、美術家の作とに分けて考えてくださってもいいわけです。例えば同じ茶器と云いまして、いわゆる「井戸(注)」は前者であり、「楽(注)」は後者なのです。よしその二つの間に形の近似があっても、全く出発が異なるのです。一方はその地方の、またはその時代の誰でもが携わったものであり、他方は美意識をもった特殊な作者のみの世界なのです。私達はそれ等の二つを一つの世界で、^{トク}トクことはできないのです。

あるいはこれを心の側から見て、伝統的な心と、自由な心とに分けてくださってもいいわけです。それ故前者はその背後に積み重ねられた過去の智慧を負います。後者はどこまでも自己を中心として歩みを進めて行きます。例を西洋にとればゴシックの心は伝統の心でした。だがルネサンス以後は自由の心が主張されました。仮に東洋の彫刻に例をとるなら、同じ仏像でも推古(注)のものは伝統的です。ですが今日展覧会に出るものは個人的です。一方は自我が従であり、他方は主となるからです。同じように民器と然らざるものとは心の置き場が異なるのです。私達は工芸の美を見る上において、まずこれ等の区別をつけることが緊要なのです。

これ等の対比によって、ほぼ民衆的な器物と貴族的なものとの差異やその特質が分明にされたことと思えます。「V」これ等の二つのものを前に見て、今の歴史家や鑑賞家達が、いずれに多く工芸美を認めているかという、全く後者なのです。前者を見る場合でも後者の眼で見ているのです。また個人作家がその製作によって吾々に示すものも、必然後者すなわち高価な特別な品物なのです。

(柳宗悦『民芸とは何か』による)

注

金地襖…紙や布に金粉をまいたりして金色にした上に絵を描いた豪華なふすま(建具の一種)。

大津絵…滋賀県の大津のあたりの名産の人物や神仏などのユーモラスな筆づかいの民俗画。

井戸…朝鮮半島で日用品として作られた、お茶に使う陶器。

楽…「らく」と読む。手とへらだけで作る、お茶に使う陶器。「楽」という名前の家が代々作ってきた。

推古…推古天皇の時代。西暦五九三〜六二八年。

問一 傍線部、1、3、4、6の漢字の読みを平仮名で解答用紙に記せ。

問二 傍線部、2、5、7、8の片仮名に当たる語を漢字で解答用紙に記せ。

問三 傍線部a「何人」についての説明として最も適切なものをア～エの中から一つ選び解答用紙に記せ。

ア 「なにひと」と読む。いつの時代の人かという意味である。

イ 「なにじん」と読む。どの国の人かという意味である。

ウ 「なんにん」と読む。人数がどれだけかという意味である。

エ 「なんぴと」と読む。どのような人かという意味である。

問四 傍線部b「認識せられたら」は、「認識する+られる+たら」という形だが、現代共通日本語の標準的な言い方ではない。現代共通日本語の標準的な言い方ではどのような形になるか、解答用紙に記せ。

問五 空欄「X」には漢字一字の語が入る。この文章の最後の三段落の中から探し解答用紙に漢字で記せ。

問六 空欄「Y」に入る文として、文脈から考えてもつとも適切なものをア～エの中から一つ選び、解答用紙に記号で記せ。

ア 自然前者が民芸の世界であり、後者が特別品の領域となります。

イ 自然前者が特別品の領域であり、後者が民芸の世界となります。

ウ 存外前者が民芸の世界であり、後者が特別品の領域となります。

エ 存外前者が特別品の領域であり、後者が民芸の世界となります。

問七 空欄「I」「く空欄「IV」について、空欄に入る言葉として文脈から考えてもつとも適切と思われるものを、次のア～エの中から一つ選び、解答用紙に記号で記せ。

空欄I ア したがって イ さて ウ しかしながら エ あるいは

空欄II ア そして イ かつまた ウ 一方 エ すなわち

空欄III ア つまり イ さて ウ あるいは エ したがって

空欄IV ア 要するに イ だから ウ これに対し エ さらに

空欄V ア しかし イ だから ウ すなわち エ たとえば

問八 空欄「A」「B」には指示を表す「こ、そ、あ」のいずれかの文字が入る。それぞれ「こ、そ、あ」のどれかを解答用紙にひらがなで記せ。

問九 この文章の議論の仕方を説明するものとして、最も適切なものはどれか。次のア～エの中から一つ選んで解答用紙に記号で記せ。

ア 従来高い美的価値を与えられていなかったものと、従来から高い美的価値を与えられていたものとの二つを対立させ、比較しながら、後者にはさらに大きな価値があることを主張している。

イ 従来高い美的価値を与えられていなかったものと、従来から高い美的価値を与えられていたものとの二つを対立させ、比較しながら、前者にも大きな価値があることを主張している。

ウ 従来高い美的価値を与えられていなかったものと、従来から高い美的価値を与えられていたものとの二つを対立させ、比較しながら、その対立を弁証法的に止揚した新たな価値を考えるべきだと主張している。

エ 従来高い美的価値を与えられていなかったものと、従来から高い美的価値を与えられていたものとの二つを対立させ、比較しながら、両者の価値を根底から否定すべきだと主張している。

問一〇 この文章の主張と合致する場合には○を、合致しない場合には×を、それぞれ解答用紙のア～エの欄に記せ。

ア 民芸とは民衆が日々用いる道具などであり、家などの建築は道具ではないので含まれない。

イ 職人が作る器でも、美術家と言われる人が作る器でも、美的価値が認められないものは少なくない。

ウ 民衆的な器などは、個人的なものというよりも、協団的に作るものでもあり、作者は無名である。
エ 民衆的な器などには、自由な心があり、作製した人の自己を中心として歩みを進めて行くというところがある。

問一 今、あなたが使っている筆記具（鉛筆など）に美的価値はあるか。理由を明確にして、あなた自身の考えを解答用紙に一五〇字以上二〇〇字以内で記せ。

